



コスタリカ国草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 6

2016.5.30

～農家だから？～

NPO 法人イフパット 研究員 小林沙羅
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

「オロティナでは、農家じゃないから出来る」。

プロジェクトでは直接支援をしているオロティナ市だけではなく、農牧省が全国レベルで実施する生活改善実証プロジェクトの対象地域との連携も強め、生活改善に関する知見や経験がファシリテーターや集落間で交換されることも試みています。先日、コーヒーやアボガド農家を対象に、生活改善ワークショップを開始したパライソのファシリテーターチームを訪ねました。今後どのように経験交換が出来るか、チームの会議に参加したところ冒頭の言葉を言われました。パライソの対象集落で何を改善したいか住民と話し合ったが、ビニールハウスが欲しいなど生産に偏った活動ばかりが話され、生活改善が目指す日常の中の課題に言及されないというのです。

確かにサンタリタ村の住民は農家とは言えません。サンタリタ村はかつて、大地主が所有する広大な牧場でした。1970年代に入り、現在の農村開発庁を通して政府がその土地を買い取り、オロティナ市内の貧困層を対象に分配、安価で販売しました。サンタリタ村の土壌や天候条件などの調査が行われ、農業に適していると判断され人々は農業で生活を立てるために入植しました。実際は、土地の一部を賃貸したり、首都の富裕層に別荘地として売るといったことが起き、農地としては活用されていません。オロティナ市以外のコスタリカ国内貧困地域からの移住が始まり、村の中では牧場に雇われていた家族の子孫である

旧住民と、別の地域から来て土地を借りながら暮らす新住民が混ざっています。多くの住民が日雇い労働の収入に依存しています。サンタリタ村のその後のワークショップではお金をかけずに始められる活動として「時間管理を学ぶ」、「家計を管理する」、「家周りを清掃する」、「家族と過ごす時間を持つ」、「運動などをして健康になる」などが挙げられています。パライソのファシリテーターチームは、これら活動は農業をしていない主婦だからこそその発想であると言うのです。一方でオロティナのファシリテーターチームがAMAGROを訪ねた際には、「AMAGROで生活改善が成功したのは、住民が農家であり自然資源が豊かだから」というコメントが出たことを思うと、真逆の反応です。農家だから出来たのか？農家じゃないから出来るのか？これは理由づけに過ぎない気がしています。

オロティナ市のもう一つの対象集落であるセバディージャ村でも第一回目のワークショップが始まりました。日本で実践されてきた生活改善の考え方を紹介する中で、参加者の一人から日本人は頭が良いから出来たと発言が出ました。すぐにコスタリカでも出来る、協力や団結が足りないだけ、という意見が出て皆が納得しましたが、こうした意見はしばしば聞かれます。〇〇だから出来ないと言ってしまうと、それ以上何も考えなくてもよい思考停止状態になります。同じくセバディージャ村のワークショップでは、大人たちに交じって子ども達がグループを作り、何を改善したいか話し合っていました。「もっと新しいことを学びたい」、「清潔で整頓された家や庭が欲しい」と言っているのを見て、切実なものを感じました。出来ないと言ってしまうと楽になるけれど、何も変わらないのも事実です。

後日、パライソの対象集落アルトアラージャ村にも行きました。戦後日本の、腰を曲げて洗濯をする女性の写真を見て話し合ったところ、農作業の際に農薬を入れるボンベが重く体が痛い、など参加住民から意見が出ていました。“私の一日”のツールを実践した時も、単に一日のスケジュールを聞くのではなく何が変えられるのかを聞くようにしたところ、女性達が朝は子どもと夫を学校・仕事に送り出すのに忙しく自分の朝食をちゃんと食べていないことに気づきました。何が欲しいかを聞いてしまえば、ビニールハウスが欲しい、農機具が買いたい、肥料が足りないと言っただけでショッピングリストが出来上がるばかりです。ショッピングリストの中の物はお金がなければ買えません。日々の生活を振り返られるようファシリテーター側の質問の仕方、意見の引き出し方で反応は変わるということ、自戒を含め実感しています。



セバディージャ村での第一回目のワークショップの様子。30人近い参加があり、会場である小学校の教室は満杯でした。